

生徒との対話から“血の通ったデータ”をつくり キャリア支援や進路探究のアップデートにつなげる

諫早高校（長崎・県立）

目の前の生徒のデータを基に
マクロデータで微調整

諫早高校は、最上位目標として「大学に入学してから伸びる生徒を育てる」掲げる、長崎県内有数の進学校だ。かつては国公立大学・一般選抜・現役合格に価値を置く傾向が強かったが、偏差値の話を一切しない進路検討会の実施、課外講習や課題の廃止・縮小による余白づくり、生徒主体の活動を後押しする体制整備などの改革を推進してきた（過去記事※参照）。そのなかで生徒の主体性の飛躍的な向上とともに、目標をもつて粘り強く挑戦する生徒が増加し、多様な進路選択が定着した。そんな同校では、データというものをもとに捉え、進路指導・キャリア教育に活かしているのか、進路指導主事、教務主任を歴任し改革を牽引してきた後田康蔵先生取材した。

後田先生は、「進路環境や社会の変化に合わせた取組を行う際、全国調査などマクロデータの参照が不可欠」としつつ、その扱いには注意が必要だと指摘する。

「例えば全国データでは人口の多い都



指導教諭・後田康蔵先生

市部の影響が大きく出るため、本校のような地方の実態と合わないことが多々あります。データが大きくなればなるほど、さまざまなずれが生じます」（後田先生、以下同）

そこで、まずは目の前の生徒一人ひとりの様子を集め、同校独自の「データ」をつくることを重視している。そのうえでさまざまなマクロデータを参照し、独自データとの共通点や違いから認識の微調整をしたり、教員間の目線合わせに使用したりするという。

独自データを得るにあたって、後田先生が大切にしているのは、生徒との対話だ。

「対話によって、データは単なる数字ではなく血の通ったものとして解釈できるようなり、いわゆる『教師の勘』も磨かれていきます。だからこそ『本校の生徒にとって何が大切か』を見極め、生徒に合わせて取組を更新していくことができる。それはAーには決してできないことだと思います」

生徒とのディスカッションや
卒業生の話から見えてくる

では、同校はどのように独自データを取得、活用しているのか。

例えば、マイノリティとして埋もれていた声をすくい上げ、学校全体の仕組みに取り入れる方法だ。かつて同校の大半の生徒は一般選抜を受験していたが、「偏差値以外の評価基準があってもいいはずだ」と、少数だった総合型選

図1 キャリアエリート8項目

- 1 校外で大人と関わり、PDCAサイクル活動をしている生徒
- 2 自身のことを定期的かつ詳細に記録しており、その内容が論理的で批判的である生徒
- 3 自身を語ることができ、多様な意見を吸収できる生徒
- 4 志望が強く、具体的な生徒
- 5 課題研究、コンピテンシーテスト、探究型授業、校外コンテストで成果を残した生徒
- 6 自己評価が著しく向上している生徒
- 7 趣味や特技が進路に直結しそうな生徒
- 8 進路探究スタンプラリー※1に積極的に取り組んでいる生徒

※1：医学、社会学、理学、工学など学問を8つの領域に分け、これらに関する校内外のコンテンツに参加してポートフォリオを提出するとスタンプがもらえるラリー

抜合格者や支援した教員にインタビューしてデータを積み上げ、総合型選抜が適合する生徒の特徴を類型化した（図1）。これに当てはまる生徒を「キャリアエリート」と呼び、教員がメンターとなつて生徒の活動に伴走し、総合型・学校推薦型選抜に向けた支援も行う仕組みをつくった。

そのメンターとしてのスキルは属人的になりがちだが、独自データによる見える化を試みている。今年度、「キャリアエリート」になりたいと思っている生徒と、その支援をしたいという教員をくじでマッチングし、試験的に1時間の面談を2回実施した。その後、生徒にアンケートを行い、面談で良かったこと・良くなかったことなどを収集。その

結果から、生徒にとってどんな面談が効果的かを分析、類型化し、そこから得られた支援のコツとして教員全体で共有する予定だ。

また、マクロ調査の結果を基に、その数値の背景にある意味を生徒との対話から探り、取組に活かすこともある。数年前に発表された日本財団「18歳意識調査」（6カ国調査）のデータを見て、なぜ日本は「自分の行動で、国や社会を変えられると思う」の割合が他国と比べて顕著に低いのかに興味をもつた後田先生は、有志の生徒数十人を集めてディスカッションを行った。さらにほかの生徒の観察も重ね、「日本は質問文にある『社会』という言葉から想起するサイズ感が他国より大きく、それ

取材・文／藤崎雅子

図2 総合的な探究の時間の3×3モデル

手法 対象	研究系 ＝考え抜く。影響を調べる。 仮説検証する	創作系 ＝描く。構想する。 製作する	行動系 ＝試す。実装する。 プロジェクト。プロダクト
人文科学 ＝人間内面・意味 ・価値・言葉・歴史・芸術	1	2	3
社会科学 ＝人間の関係	4	5	6
自然科学 ＝自然現象	7	8	9

例えば、領域1は哲学や倫理学など、2はメディア学や芸術学など、3は教育学や心理学などが関連する学問として想定されている。その領域を探究するなかで、自分がどこを歩いているのかを認識するための地図として3×3モデルを活用している。「一つの職業を想定したキャリア設計でなく、自身の気になる社会課題や思考の仕方を理解し、職業名によらない軸をもつことで、今後も成長しながら柔軟にキャリアを築いていけるのではないか」と後田先生。



1年生の総合的な探究の時間の様子。

が数値の差として表れているのではないかと考えた。以降、まずは部活動やクラスなど半径5メートルの「社会」を自分ごと化することから、社会参画の意識を高めていくことに力を入れているという。

また、卒業生の事例も貴重なデータとなっている。後田先生は卒業生に「大学を辞めたいと思ったときは必ず電話してこい」と伝えており、随時相談に乗っている。そのなかで中退に至る2つの傾向を見つけた。一つは、高校時代に進路選択で迷うことがなく、学問や進学先

に対する解像度が十分に高まっていなかったこと。もう一つは、自ら計画・実行・振り返りを行う自己調整力が未熟で、大学の自律的な学びに対応できず単位を落としてしまうこと。それらを防ぐ教育を意識するようになったという。

複数のデータから得た課題感を 進路探究プログラムに反映

同校は昨年度から総合的な探究の時間にて、進路指導と関連つけた新たな探究プログラムを実施している。その背景にも、いくつかの独自データがある。そのひとつが、年間数十件の視察を受け入れるなかで他校の教員から得られる情報だ。

「近年、『SSHのような探究スタイルを理系以外にも展開しようとしてうまくいかない』という課題感をよく聞くようになりました。そのなかで、すべての生徒にとって満足度の高い探究とは何か、考えるようになりました」

そこに、卒業生の進路の解像度に対する課題感が重なり、「コンテスト入賞などの結果を求める探究ではなく、進学の学びに対する理解を深めていくプロセスによって、すべての生徒にとって進路の役に立つ探究にしたい」と、独自の進路探究プログラムの考案につながった。

そのプログラムの核となっているのが、学部・学科の切り口にもなる、学問対象（人文科学・社会科学・自然科学）と研究方法（研究・創作・行動）の2軸による独自の「3×3モデル」だ（図2）。

「2つの軸を意識した探究実践を通じて、学問には複数のアプローチがあることを学び、自分がどの考え方で世界を見ているのかを言語化できるようにすることを目指しています」

「18歳意識調査」の結果を通じて得た気づきを踏まえ、「大きなテーマで探究サイクルが一周もできずに終わるのではなく、小さな一周から始めて徐々に視野を広げながら何周も回すことが大切」と後田先生。1学年ではまず9領域を一つずつ取り上げ、「納得いかな」「好き」など身近なテーマの種から小さな探究を行い、学問による問いの立て方やアプローチの違いを体験する。その経験と自身の興味・関心を掛け合わせて一つの領域を決め、2学年からひとまり大きい探究に取り組んでいくという流れができた。

また、卒業生データを参考に、自己調整が求められる大学の学びを意識した工夫も行っている。

「探究プロセスを逐一記録させることで、成功の再現や失敗の修正につながるとともに、状況をメタ認知しながら次にやるべきことを見出していく自己調整力の育成を図っています」

生徒がデータを批判的に 読み解く力を育成

このような教員のデータ活用のみならず、生徒のデータリテラシー育成の取組も特徴的だ。統計学や情報学の知識を身につけるのではなく、「提示さ

れたデータをいかに批判的に見るか」という姿勢を重視。1学年初期の総合的な探究の時間に、具体的なデータを用いた学習を組み込んでいる。

例えば、模試の判定結果（A判定、B判定など）の統計的な意味を正しく捉える学習。日本の平均所得に関するデータを題材とした、「平均値と中央値の差は何を表しているのか」「どちらに注目すべきか」などについての議論。某衣料品メーカーの年間総収入から日本人が購入する同社製品の着数を逆算して社会を眺めてみるなど、さまざまなデータの読み解き方を学ぶ。

さらに、統計資料を見て、どのようなアンケート方法で行われたかを考える。その方法によって異なる結果になることを理解し、探究活動のなかで生徒自身が調査を実施する際、回答者によって言葉の解釈のずれが生じないような設問設計や、選択肢の数の設定などに活かしている。

「データを活用して社会を批判的に捉えることを学び、これからの自分の生き方を主体的に考え、行動していく力としたい」

目の前の生徒との対話から得られたデータを基盤として、生徒の実態に合う取組を生む。生徒たちにもまた、データを使い社会を読み解きこれからの考える力としている。そんな同校の事例は、データがキャリア教育や進路指導をアップデートさせていく重要な素材であることを示している。